

17歳 伊能家に入婿

50歳 隠居

56歳 測量開始

73歳 死去

vol. 1

# 伊能 忠敬

▶▶ Inou Tadataka

## 家業と地域に尽くした後、 50歳でセカンドステージへ。 17年をかけ日本地図を完成

中国の思想家・孔子は「五十にして天命を知る」と言ったが、「50歳」で心機一転、新しいことにチャレンジした人の話は身近なところでもちらほら耳にする。年齢50は会社では出世レースのかたがつき、家庭では子供も成長して、自分自身の人生を改めて考えるには良いタイミングかもしれない。とは言え、それは現代の話。50歳を迎える前に亡くなる人も多かった時代、50歳ともなれば気力・体力ともに衰えているのが普通だっただろう。

伊能忠敬は「正確な日本地図を初めて作った人」だ。それも「50歳を過ぎてから」「全国津々浦々を歩いて」。その大偉業のみに目を奪われがちだが、商人としてもきっちり成功を収め、地域にも大いに貢献した人物である。

### ▶▶ 自らの使命に専念した 32年

1745年、九十九里沿岸の漁村で生まれた忠敬（幼名：三治郎）は、6歳の時、母を亡くした。婿養子だった父は妻の死後、3人の子のうち末子の忠敬だけを残して実家に戻った。忠敬が10歳の時、父が迎えに来た。父の実家は名主を務めるほどの家柄だったが、父は出戻りの身ゆえ、生活の目途が立つまでに時間を要したのだ。

忠敬は幼い頃から学問への関心が高かった。とりわけ算術では大人顔負けの知識と技能を身につけ、周囲を驚かせていた。継ぐべき家のない忠敬に、佐原村の名家・伊能家の婿養子の話が舞い込んだのは17歳の時である。

利根川流域に位置する佐原村は舟運が盛んで、小江戸と名乗るにふさわしい賑わいぶりだった。伊能家は酒造りなどを営んでいたが、長女の夫が他界して以降、主が不在のままだった。新しい主となった忠敬はその能力を發揮



上総国（現在の千葉県）出身の江戸時代の商人、のちに測量家。56歳から亡くなる直前まで日本全国を丹念に測量して完成させた、いわゆる「伊能図」はその後、さまざまところで活用された。

して、懸命に実直に商売に取り組んだ。同時に地域のためにも尽力した。天明の大飢饉では他の地域で餓死者が跡を絶たない中、忠敬は蔵に貯えていた米を放出し、佐原村では1人の餓死者も出なかった。その手腕と人望が認められてか、39歳の時には名主より上の立場にあたる「村方後見」に任命されている。

そんな忠敬が最初の隠居を申し出たのは45歳の時。だが、領主は認めなかった。それほど地域にとって欠かせない存在だったのだろう。その後、隠居に向けて着々と準備を進め、49歳でようやく許可が下りた。

### ▶▶ 自分がやりたかったことに没頭した 23年

50歳で晴れて隠居の身となった忠敬は江戸に移り住み、天文算術の勉強を始めた。「算術で世の中をよくしたい」という少年の頃からの夢と、新たな学問として可能性を感じたことが「天文算術」を選んだ理由である。師と仰いだ天文学者・高橋至時は19歳も年下だったが、学問を通じて互いに尊敬し合える関係を築いた。

忠敬を測量の旅に駆り立てたのは「子午線1度の長さを知りたい!」という知的欲求である。それは地球の大きさを知ることにつながるからだ。人の行き来が制限されていた当時、忠敬が測量を実現できた陰には、至時による強力な後押しがあった。56歳で第一次測量を行ってからというもの、忠敬は毎年のように測量隊として各地へ赴き、足掛け17年もの期間を費やし高精度の日本地図を完成させた。

決して体が丈夫ではなかった忠敬が古希を迎えてもなお、測量を続けた理由、続けられた理由。そこには人生100年時代を生き抜くヒントが詰まっている。

（執筆／ライター 篠田りょうこ）